

ふるさとルネサンス

第5号(二〇〇六年十月)

「責任」のルネサンス

打田昇三

「三面等価の原則」というのがあって、「権限と義務と責任」は同格なのだとか。

官民を問わず、本来、組織の頂点に居る者は戦国時代の城主のように命令を下すかわりに極言するなら、「大事の際に責任を執る」のが最大の仕事のようなものである。

武運拙く開城する場合には自分が切腹して部下を救うのであるが、この頃は何かあると「私は知らなかった」とか「部下の不始末」で済ませトップに責任が及ぶことは少ない。

十年以上前の某新聞に作家の童門冬二さんが「全責任はトップにあり」というコラムを載せた。加賀百万石の始祖・前田利家が重病で死を悟った時に、会計担当の下級武士を呼び重役に立ち合わせて裏金の帳簿に自分の判を押させ、「全ての責任は俺にあるのだから、後で問題が起ころうともこのことで担当者を責めてはならない」と申し渡したという、苦勞人の殿様らしい話であった。

裏金の問題は「世論の正義」に任せるとして、死の直前まで部下の責任に配慮する人物というのはそうざらにはいない。

大正十二年十二月に、国会へ向かう途中の昭

和天皇(当時、摂政)の車が狙撃され同乗していた侍従長が顔に怪我をした。関東大震災の折りにアナキスト大杉栄らが逮捕虐殺されたことへの報復行動らしかったが、犯人の青年は直ぐに逮捕された。

政府の筋書きでは「摂政の恩赦」を売り込んで無期懲役ぐらいになるところ、「私は正しい」などと余計なことを言ったので、すぐ死刑に変えられてしまった。

この事件では内閣が総辞職し、警視總監と警務部長(読売新聞のボスになった正力松太郎)が懲戒免職。さらに青年の郷里の県知事が減俸。青年が学んだ小学校の校長と担任の教諭が引責辞職をさせられている。

小学校で「忠君愛国」を良く教えなかったという理由と思うが、この青年は旧制中学の頃には右翼的で、左に変わったキツカケは郷里に陸軍大臣が来た際に、授業を休ませてまで沿道に生徒を整列させたからだというから責任は、その傲慢な大臣だけにあるのだが、

事件が事件だけに立場上の監督責任を厳しく追及したようで、「小学校」は筋違いだ、内閣総理大臣以下の辞任は当然である。

政治家の究極目標は首相にあるようだから自薦多薦の候補者は大勢居る。何かあれば、すぐ

内閣総理大臣に責任を取らせるようにしておけば交代が早く政治家に希望が湧くだろうし、外遊ばかりしていないで、失政が無いように気を配るから日本も良くなる？

戦国時代まで重視されていた「トップの責任」が天下りしてきたのはいつ頃からであろうか。勝手な推測だが元禄十四年に起こった「忠臣蔵」事件が影響しているようである。

この起こりは江戸城中、松の廊下での刃傷事件であり、浅野内匠頭が吉良上野介に斬りつけたことから始まる。殿中で刀を抜けば切腹という決まりがあったようだから内匠頭は言い逃れが出来ない。斬られた上野介は無抵抗で罪を問われなかった。

事件から一年九か月経って、大石内蔵助らが「喧嘩相手の吉良が何のお咎めも受けないのは不公平」として仇討を決行する。

一般には朝廷からの使者を接待する役目の浅野内匠頭に対して、指導役の吉良上野介が「苛め」を繰り返したことになるが、そのような史料はないらしい。

浅野家は十八年前にも同じ役目を命じられていて少年藩主とは言えども内匠頭は経験があったし、藩でも記録を残していたであろうから、服装がどうか豊替えがどうか芝居の見せ場になっている部分は在り得ない筈だと指摘する研究者もいる。

では、なぜ城中の事件が起きたのか。これも賄賂説、塩説などあるが、相撲協会の汚職事件ではないから信用は出来ない。接待役を苛めて

失敗されたら困るのは指導に当たった吉良自身であり、この説も消える。

江戸城中で刃傷事件が起こったのは忠臣蔵だけでは無い。徳川家康が将軍になってから明治維新の江戸城明渡しまで二六五年間に大名による刃傷事件は六回も起こっている。

その二件目は延宝八年（一六八〇）の初夏に発生した。江戸城中ではないが、城中より大事な第四代将軍の葬儀場（増上寺）である。

葬儀委員の大名で丹後宮津七万三千石の藩主・永井尚長が、同僚委員の三万五千石鳥羽藩主・内藤忠勝に斬られた。当然、加害者の忠勝は切腹させられ、お家断絶となった。

理由は「書類を見せる、その必要はない」の単純なトラブルらしいが、葬儀を主催したのが第五代将軍になったばかりの徳川綱吉。

水戸光圀などの推薦で将軍になって先代の葬儀を厳粛に執行している最中に刃傷沙汰を起こした内藤忠勝の名は忘れない。

そして四年後に江戸城内で若年寄の稲葉正休（いなばまさやす）が、大老の堀田正俊を刺殺する事件が起こった。現職閣僚の一人が首相を刺したようなもので、将軍・綱吉はショックを受けたが、当事者二人は親戚同士で個人的なトラブルらしかった。勿論、加害者もその場で斬られた。

将軍・綱吉は自分が将軍の間に大名が事件を起こすのは何だろと落ち込んでいたが、「生類憐れみの令」を出して何とか平穏な年が続いていた元禄十四年の春、大切な勅使を饗応する役

目の大名が松の廊下を血で汚した」という緊急報告を受けた。

加害者の経歴を聞いたところ、忘れもしない増上寺事件の加害者・内藤忠勝の甥（姉の代）という事件を起こした原因は本人の頭痛持ちとストレスから来る発作的な凶行と判断された。激怒した将軍は直ちに浅野内匠頭長矩に切腹を命じたのである。

これで一件落着のところ、利口者の大石内蔵助が家臣の将来を考え「狂人の殿様」に仕えていた過去を消すため「忠君愛国」を逆手にとって主君の仇討というパフォーマンスを考え出し、隠すようにしながら宣伝した。

上手くいけば名声が上がり、最就職も有利になるだろう…ところが忠義の名目に使った「喧嘩両成敗なのに吉良がお咎めを受けないのは不公平」というフレーズに幕府が興味を持ったのである。

元々、戦国大名は天下に号令するときのことを想定して「ご先祖」に古代の有名人が皇族・貴族などを登録していた。天下を統一した織田信長は平氏を称していたから石岡に所縁のある平国香ということになる。

豊臣秀吉は自分から「おいらは百姓だ！」と威張っていたから出世し過ぎて先祖を決めるときに「農業の神」を出してくる訳にもいかず迷っている時に都の公卿どもがオベンチャラで「藤原氏」を売り込んだ。

用意周到な徳川家康は、源頼朝が創設した征夷大將軍」を狙っていたから源氏に絞り郷里

の三河近辺をはじめ、各地に分散していた足利一族などの源氏系小豪族を取り込んでおいたのである。吉良氏は源氏の名門であり早くから徳川家と繋がっていた。

将軍の治世も四代、五代が三十年ずつ続いて安定し、「徳川」だけでステイタスになると吉良に頼っていた過去は不要になると吉良に頼っていた過去は不要になる。

幕府は赤穂浪士の仇討を利用して「吉良を潰そう」と考えたらしい。大石たち浪士の行動を百も承知しながら吉良家を護るべき立場の名門・上杉氏を牽制して仇討の実行を容易にした。もし上杉が本格的に吉良を護ったならば討ち入りは失敗し、上杉も断絶させられたところだが米沢藩の家老・千坂兵部が主君（吉良上野介の息子）を抑えた。

一方、大石内蔵助は見事に仇討を成功させたけれども幕府の陰謀は見抜けず、全員が名誉と引換えに切腹させられた。

討ち入りの後で、吉良家は「積極的に反撃しなかつた」というゴジツケの理由で責任を取らされた。領地は没収、養子の当主は信州諏訪に流されたと伝えられる。刃傷事件の時は「負傷しながらも事件に関わらず誠に殊勝であった」としてお咎めなしの裁定を下した幕府がある。

四十七士による吉良邸への夜襲は「仇討」とは言いながらも、治安を乱す行動になる。米沢藩の応援が受けられなかった吉良邸では清水一学などのガードマンが必死で戦っていたので、幕府に咎められる筋合いはない。

幕府は「吉良家を潰す」ために扱われた責任の追及を公然と行い、芝居の作者は赤穂浪士たちの行動を「忠義」の美名で宣伝した。

どうも、それ以来、日本人の「責任」に対する感覚が「三面等価の原則」から外れて、「上を庇う忠義」という歪んだものになってしまったように思えてならない。悪人どもはそれに便乗して責任逃れをする。

大正時代の「撰政狙撃事件（難波大助事件）」に対する政府の対応は、忠臣蔵の事件での幕府の対応に似ていると思った。

どちらにも、「裁判の公平な判断」が無く、「政治が法を左右して」いる。例えば將軍の葬式で上司を斬った内藤忠勝の藩では、農民が得た収権の八割を年貢に徴収していたとされるほど民衆が虐げられていた。

そのような封建時代と、一応は「大正デモクラシー」と呼ばれた時代での「責任追及」の形が似て居るといふのは何とも悲しいことではあるが、どちらも権力者の作為で行われたもの。曲がりなりにしる一応は「民主主義憲法」が生きている現代こそ「責任は権限と義務を持つ者が取る」という原則を確立して、弱い立場の者を護るべきであると、何の権限も責任も持たない老人は考えているのだが…。

石岡のお祭り

鈴木真紀子

石岡生まれの人たちと同じように、石岡のお

祭りを最初から最後まで見てみたいと今年はずか思いました。

お祭りの初日こそが石岡の人たちにとっては一年のはじまり「元日」なのだそうす。夢のような正月三ヶ日が終わるとまた翌年の正月を待ち望むといひます。その為には稼ぐのだと。そんな気持ちで迎えられる神様はなんと幸せなことでしょう。

他の地方の、華やかでにぎやかな中にも整然として、見られることを意識した振る舞いのお祭りに慣れていると、石岡のお祭りはあまりにも雑然としてけじめがなく、また他者の目や思惑を意識しない普段の顔の行列に、とても違和感を覚えていました。誰もかれも粋なお祭りへアーいなせなお祭り衣装なのに…です。

どうしてもっとみんなが打ちそろうってパフォーマンスしたり、あるいは晴れがましい顔で、沿道に並ぶ大勢の観客を楽しませることをしないうんだると、とても不思議でした。先月号で書いたおもてなしの「心」がそこには感じられないんです。これでは関東三大祭り自分たちだけが大声で言っても観光客のない三大祭りなのではないかと…。

でも、お祭り会場の一角でお手伝いをして思いました。

本来お祭りは神様を喜ばせるために行われるもので、神様が喜んでくれるのがまず第一番。それから海の幸・山や里の幸をいただいた神様

に豊穣を感謝して捧げるのが二番目。そして第三番目、お祭りの時こそが、汗水たらして一年間働いた人間に許されたお楽しみの日なんですよ。ね。

そうなんです。自分たちの町の神様に喜んでもらい、神様から無礼講の許可をもらって、自分たちがめいっばい楽しむのがお祭りの原点だったんですよね。とくに万葉の世から歌垣などで有名な筑波山の麓に住む、常世の国の子孫ですものね。

そういう視点からお祭りを眺めると、こんなに情報が行き交う時世でこんなにも祭りの原形を保っているというのも尊く思われます。何より見に来られた土地のお年寄りの方たちの嬉しそうなこと！

「今年はこれねがど思っただけどよかった〜！」

と拝むようにしてお神輿を眺め、ひよつこや狐の舞いに泣き笑いをしているのです。また障害をもたれた多くの方も、お家の方に付き添われて見に来ます。付き添いの方が、

「この子はお祭りが好きで好きで三日も通っている！」

と言われます。石岡離子で育った方たちには、それこそ自分の「楽の音」の原風景にタイムスリップし、心身に快感物質があふれるのだと思えます。そして、ふるさと石岡を離れている人たちにとっても、9月はきつと心躍ることでしょう。

最終日の午前中は、「俺を忘れるなよ」と言わんばかりに竜神様も参加して大雨を降らせましたが、還幸祭の行列を邪魔することもなく、無事に神事が終わりました。そして見事な夕陽をプレゼントして、神々はまたそれぞれのお役の場に戻ったことでしょう。

おまつり

兼平智恵子

テンツクテンツク

愛捧げて

笑い伝えて

厳しき与えて

勇み振りまく

今年のお祭りも、アンケート調査の手伝いをさせてもらい、皆さんのご意見、ご要望に納得し、「歴史の里いしおか」が全国に知れ渡るように、と大きな夢を抱かせてもらいました。

神幸祭の十五時半頃の駅前、中町、香丸通りは閑散としてみえました。

「いつもはこの辺り、山車もいて賑やかなのに、広々とした感じが寂しい。今年のお祭りは変だね」とは、元年番町内に住んでいた老夫婦。

「祭りに関してのイベントでもあればいいのに」とは、縁石に腰掛けていた初老の男性。

「石岡の商人の方が、町おこしの為にも前に出て欲しいよね」とは、中年の土浦の女性。

二日目の大祭は、うって変わって、身動きが取れないほどの人の波。明神輿も活気付いて「家内安全」「無病息災」を願って大いに躍動。

最後の還幸祭は五穀豊穡を約束しての恵みの雨をちゃんともたらして、市民の望みを叶え、無事還座なされました。

私は、三日目も祭りの賑わいに浸りながら、民族資料館へアンケート容姿を届ける。濱田先生、熱っぽく後世に伝えるべく歴史の里いしおかの夢を語ってくれました。

今の神栄跡地に、奈良の都とともに東国の奈良として栄えた建物の、せめて模型での復元と山車会館までは行かなくとも、山車人形の常時の展示を、と。

思わず私も更に夢を膨らませ、折角発掘した倉庫に眠る全ての価値ある歴史物の展示と昭和四年の大火災後に建てられた街なかの十八軒の登録文化財の紹介を、と声してしまいました。

石岡市文化財保護審議会員の神戸先生によりまずと、十八軒の他にも看板を外したり、手直した天上等を剥がすと他の街には見られない石岡独自の歴史的建物があり、日の目を待ち望んでいるとの事でした。

行政に叫ぶばかりでなく、どうぞ町内の山車人形を管理する総責任者の方々、歴史的建築を大切に保存されている方々、そして市民の皆さんの力で古都いしおかの扉を開くときではないでしょうか。

いらして頂いた祭り好きな皆さんの為に、イベントを希望する人の為に、そして今年のお祭り

は変だねと心配する老夫婦の為に、石岡の歴史を見学できる会館を考えることは、次の世代に、その次の世代にと歴史を伝え残していく一つの策ではないでしょうか。

古里

小林幸枝

大地に人の命の十世に継がれてふるさと十世の移ろいに洗われて継がるは物語

これは城中山の鈴が池に伝わる物語を基に近藤治平さんが書き直された「新鈴が池物語」の冒頭に書かれた詩です。

近藤さんが言つのは、ふるさとを「古里」と書く理由として、こじつけではあるけれど十世代にわたって口に伝えられるもののある里のこと、という説があるそうで、なるほど漢字をみると十と口と里で古里です。

今年もお祭りが終わりました。

石岡のお祭りというのは、やはり古里なのだろうかとふと思つてしまいました。石岡といえは祭りと言われますが、はたしてそれだけではありません。

近藤さんが言われるように、足元にはたくさん自慢したい古里がうずもれてあるように思います。

私達の劇団「表現舎しゅわーど」は、十一月

二十六日に、つくばのカピオ・ホールで初めての公演を行います。総合タイトルは「石岡物語」その内容は、今紹介しました「新鈴が池物語」と船塚山古墳をモチーフにした「古里は春の夢」そして、石岡の風の中に詠んだ詩文「ふるさとの風に吹かれて」です。

三本とも近藤治平さんの書かれた作品ですが、繰り返し読みながら舞技のイメージを作っていると、お祭りも自慢する大事な古里だけれど、それ以外にも、もつと沢山の自慢する古里があることに気付かされます。

十一月のカピオ・ホールの公演では、お祭り以外の石岡の自慢を精一杯、演じたいと思います。何たって「石岡物語」なんですから。

ボーイ

近藤治平

腰掛け三年。そう思って石岡にやって来たのだったが、終の地と決めるに至ったとき、東京での仕事を一切断った。そして、孫娘と呼んで可愛がっていたバグ犬の「葉津」を引いて出し山周辺の雑木林を散歩しながら、風の声を聞いて一行文を吟くのを楽しみに過ごしてきた。

しかし、一日の時間を潰すにはそれでは足りず、葉津がパソコンを起動すると自分も書き物をするかのようにならずやってくる膝に乗るのをヒントに、三百枚ほどのお伽の物語「皇帝ペンギンの首飾り」を書き上げたのだった。それで、これからは葉津と一緒にお伽の物語を書く

ことを移ろう日を潰すことももう一つに加えようと思っていた矢先、病弱だった葉津が亡くなった。

生をうけたものは必ず生の終わる。「生なく滅びなし」であると理屈してはみるが、愛するものが命を閉じることは矢張り悲しさの伴うものである。

その葉津が亡くなって、一カ月後、一匹の白い猫が夜中に玄関で細い声で呼んだのであった。妻が出てみると、痩せた小さな白い猫が戸の前に座って、あけるのを待っていた。入れてはダメだよ、というのを聞かず妻が抱きいれてしまった。

電灯の下に見ると、白い毛も大して汚れていないわけでもなく、どこかに飼われていたらしい人馴れがあった。大きさを考えて春にでも生まれた感じであった。少し経って家に帰れと外に出したが、玄関に駆け上がった。止む無くその夜は、体を拭いて家に泊めてやったのだったが、そのまま居付くことになってしまった。

器量の良い猫だったので、飼い主が探しているだろうと近所に聴いて回ったが、飼い主は探せなかった。こうなったら家に置いてやるしかない。

我が家の住人になるのなら、我が家のルールに従ってもらわねばならない。引っ掻かれるだろうと覚悟してシャンプーをしたら、おとなしく洗われるのだった。間違いない何処かの飼い猫である。しかも手入れの良い。

元来猫好きではないので、飼い主の見つかることを望んだのだったが、本当の住人になってしまった。器量よしの葉津であったが、この猫も器量よしだからいかと納得させられてしまった。我が家の住人になったのだから名前がないと不都合なので、綺麗な薄ピンクの耳が印象的だったので「耳」と名づけた。近所の友人が「ミミ」と呼ぶと私はすかさず「耳」ですと言いました。

その耳ちゃん、二ヶ月ほど過ぎたある日突然出産したのであった。前日から妙にミャーミャー鳴くのでどうしたのかなと思っていたら出産であった。しかも第一子が逆子で、尻尾が垂れて出ているのである。

慌てて膝に抱いて、耳ちゃんを傷つけないように引き出してやった。当然、死産である。お腹の様子を調べるともう一子いる。腹をさすり体力を消耗している耳ちゃんを励まし、とりあげてやったのが子猫のボーイである。第一子に比べると小さな子であった。

小さく産んで大きく育てるの見本のようにボーイは育っていった。困ったのは、生まれたその晩からであるが、私が床に入るとボーイを啜えてきて私の腹のところを置いて行くのである。排尿排便されると厭だなど思っていたら、定期的に耳ちゃんがやってきて、乳を与え、排尿排便を促し、舐め取って出て行くのである。この耳ちゃんとボーイを眺めていて、亡くなった葉津とを合わせて発想して書いたのが、柏原池の伝説の平成版「新説柏原池物語」である。

耳ちゃんとボーイは、二部作にした第二部に登場させている。

このボーイが、九月十二日突然に命を絶つたのである。全く前兆のない突然死である。表現舎しゅわーどの稽古に出かけて、帰ってきたら既に硬直していたのである。

思い出してみると、何時もは出かけるその時間には、耳ちゃんと抱き合って寝ているのだが、その日に限って玄関まで見送りにきてミューと鳴いたのだった。お留守番しててね、と声をかけ出かけたのであったが、あれはお別れのミューだったのだろう。

葉津が亡くなったのも九月のことであった。石岡の九月は、年に一度目を覚ますお祭りの月だが、私にとっては悲しみの月のようだ。それに加えて、密かに恋心を燃やしていた人がいたのに、みごと振られてしまった月でもあった。どうも私にとって九月というのは、あまり嬉しくない月のようだ。しかし、九月というのは私の誕生月でもある。

幸運が持ってきた悔しさ 伊東弓子

夏草を刈ったまま放っておいた後に伸びた秋の草も、木枯らしに乾涸びて春を迎えた。

あの乾涸びて硬くなった枯れ草どもを刈り取らないと、実りを作ることは出来ない、やっそこ踏ん切りをつけて、草刈を始めた。

畑の周りを先ず刈り取って一区切りついた。

劇団「表現舎しゅわーど」つくばカピオホール公演

11月26日(日曜日)

朗読舞劇『石岡物語』

小林幸枝のサイン(手話)を基軸にした舞演技が

幻想的な『ふるさと物語』の世界へと誘います

生まれながらに音を知らなかった聾俳優小林幸枝が心に物語の声を聞き、森田流笛方堀井洋子の奏でる風の声に舞い、演技します。

石岡に生まれた新しい舞台表現「朗読舞/朗読舞劇」初の舞台公演です。

脚本：近藤治平 演出：白井啓治

出演：小林幸枝 山重幸 鈴木真紀子
しらみひろぢ

笛方：堀井洋子

石岡・ふるさとルネサンス劇団「表現舎しゅわーど」

2006年11月26日(日)14:00開演

場所：つくばカピオホール 料金：2,000円(税込)

それで次は十文字に自分の歩く道を確保して「やったね」と嬉しくなる。四区画になった畑に何をやるうか。あれこれ考えて一人笑顔を楽しむ。

刈り取った枯れ草を二箇所に集め火をつけた。パチパチと乾いた良い音をたてたと思ったら、一箇所の枯れ草が突然大きな炎となり、たちまちに火の海となってしまう。

「どうしよう！」恐ろしい勢いで火は広がっていった。火の海。そう本当に辺りは一瞬に火の海となってしまう。

恐怖で一瞬立ちすくんでしまったが、慌てて落ちていく枯れ草で叩いてみたが火は益々広がっていった。鎌で周りの草を刈り始めたが、全く効き目がない。火は風を起こして、風がまた火の勢いを大きくしていく。唯おろろと走り回

り、火を消すつもりになつてゐるのだが、火から逃げているに過ぎない。

助けを求めに火から離れるわけにも行かない。携帯電話もない。直ぐ側の道路を走つてゐる車の人気がついて助けに来てくれないだろうか。泣きたくなる。この辺り一帯を燃えつくして罪人になるしかない。

そんなことを思つたら、日本武尊のこと、火あぶりの刑で焼かれた人のこと、わざと火をつけてそれをもとに芸術作品を作つた人のことなど、動けないからだとは反対にゐるんなことが頭の中を駆け巡つていく。

おろおろ駆けずり回つていて、ふと気がつく。火は土手の手前のところで止まつてゐた。どうしたのだらう。でも、良かった、良かった。火の収まつた畑の真ん中で私は座り込んでしまつた。大事にならなくて本当に良かった。火のいなくなつた跡には黒焦げになつた草々の茎がツンツンと突き刺さるように残つてゐた。疲れがどつと出て、力が抜けぼんやりしてゐると、

「やー、よくやつてるね。きれいになるわ。ごころうさんだね」

と大きなビニール袋を提げた近所の人が声をかけてくれた。

「そろそろお茶時だから食べつといいわ」

そう言つてパン一袋をくれた。その言葉に急に空腹感もでて、ありがとうの前にてが出てしまつた。孫さんの話やご主人の夜勤の話などしながら一応冷静さを保つていたが、心の中では

早くパンを口にしたい気持ちで一杯だつた。

「ひまどりしちやつたね。悪かつたね。あんまり根つめないでやるといいよ」

何だか心の中を見られた思いがして恥ずかしい。それだけに直ぐパンを口に入れられず道具の置いてある脇に置いた。細いビニール袋に小さいパンが三つあつた。中身は餡とクリーム、ピーナツの三色に違ひない。それともチョコレートかな、と想像しながら、食べるときの楽しみが倍になるように、もう少し残つてゐる草を刈り始めた。

するとバーサバーサ、ウオーウオーという声が聞こえた。烏だ。何でもこんな低いところを飛んでと思つて振り返ると、パンの袋を掻つ攫つていった。

「こらー！」

そんな声で驚く烏ではない。低く飛んで隣の柿畑の枝にとまつた。そして、こちらを悠然と見ている。

「かえせ！」

ときり立つて石をぶつけてやるが、届くはずもない。敵はそのことを良く知つてゐる。次にまた罵る私を、もう遅いといわんばかりの目で嘲ると、悠々と皿に一段高くなつてゐる栗畑の枝に飛び移つていった。

それなら反対側から脅してやろうと、鎌をもつてそーっと回り込んだとき「パーン！」といふ破裂音。もしや袋が破れたか。急いで栗畑に駆け上がると、入れ違いに道路沿いの電柱に飛び去つてしまつた。追いかけてみたい気持ちはあつ

たが、この上糞でもかけられたら目も当てられない。確かに口には二個のパンを啜えていた。

もしかしたらと探してみると、破れた袋が落ちてゐるだけでパンはなかつた。早く食べておけばよかつたと、そのことばかりが頭の中を占領していった。

もう作業をする気にもなれず、家に戻ると熱いお茶をがぶ飲みにした。お茶菓子もなく、一層の疲れを呼んでしまつた。

忌々しさを通り越して、情けない春の午後のひと時を思い出して、秋の陽だまりに足をのばして、今日もお茶をがぶ飲みしている。

目守つて呟いてみよう

白井啓治

ああ、今日も何事もなく詰まらない一日だつた、と思つ人も少なくないだらう。しかし、何事もない日など一日たりともない。

何もなかつたと思つ人は、目守る(まもる)＝目を凝らしてじつとみる(ことを忘れたり捨ててしまつた人だ。

庭の草取りをしていて腰が疲れてやれやれと手を止め、むしり取つた雑草を恨めしく、いや憎憎しく睨みつけてやると、こんな発見もある。

「雑草だつて目守れば花のきれい」

発見をこんな風に声に呟いてみると、それが連鎖して、

「雑草という草はなし、害虫という虫もなし」

なんていう発見が生まれてくる。そんなこと
発見でもなんではないじゃないか、馬鹿馬鹿し
い、と思われるかもしれない。しかし、発見と
いうのは世紀の大発見ばかりを言うのではない。
発見というのは、埋もれて見えなくなってい
ること、ものを掘り起こして見えるようにする
ことなのだから、当たり前のことではあるが、
雑草という草はない、と気付くのも立派な発見
なのだ。

「雑草という草はない」こんな発見、気付く
ことだけでも、私は草花の名前だけの種類だのに
は興味がないのでここまでであるが、好きな人
は野草辞典を引いて、名前を調べることになる。
こうなると今日も何も無かったところではない。
大した一日になるというものである。さらに、
このことが新種の発見なんてことにも繋がるこ
ともあるのだから。

人間というもの不思議なもので、目にしたも
のや感じたことに対して声にして問いかけてみ
ると、意外な発見と発展を見るものである。そ
の声は何でもいいのだ。「何?」「ええッ?」「お
い!」それだけで素敵な一日の出来事を発見す
ることが出来るものである。

「おい 蟻ん子よ 急いでどこ行く」
これでもう立派な歌になり詩になり、心が楽
しくなるものである。

絵と一行文の生徒さんには、発見の取っ掛か
りをこのようにお話ししている。趣味は自分の
暮らしを楽しむために有るものだから、一行文
も楽しいことの発見の道具にしましょう。その

ためには、先ず頭に「今日は楽しかった」「今日
は嬉しかった」と序詞を置いて、その次を書い
てみましょう、と。

すると、皆さんこれまで無意識に捨てていた
暮らしの中の楽しいこと嬉しいことを拾い上げ
改めて自分の一日の暮らしに感心される。

何事もないと思っている一日も、ちょっとの
時間振り返って目を守ると、素晴らしい一日だ
ったことに気付かされるものである。

今月のふるさとルネサンスの予定

絵と一行文教室

十月六日(金)・十月二十日(金)

午後一時半～午後二時

日々の暮らしの中に小さいけれど心を喜ばせ
てくれた出来事、発見を自由律に一行の文に
紡ぎ、色に染めて、自分を褒める。時には、
思う人に褒めた自分を葉書に刷いてお裾分
けする。暖かく楽しい教室です。
体験参加(無料)大歓迎です。

劇団「表現舎しゅわーど」アトリエ公演

十月二十一日(土)

一回目午後二時開演・二回目午後五時開演

朗読「ふるさと再発見」

うちだしようぞう作

・志筑八千五百石 朗読・山重幸

・常陸国府の源平合戦 朗読・鈴木真紀子

・花は咲けども 朗読・しらぬひろぢ

読書の秋のこの月、私達のふるさとのことを

朗読を聴きながら、一緒に再発見の旅をして

みませんか。

前売券1300円 前売ペア券2400円

当日券1500円

カフェ・キーボーにて発売。

お知らせ

十一月二十六日(日)劇団「表現舎しゅわー
ど」では、これまでカフェ・キーボーで続け
てきたアトリエ公演の集大成として、初めて
の舞台公演をつくばカピオのホールで行わ
れることになりました。団員の皆さんはお祭
りだけではない石岡の自慢を、と連日稽古に
励んでいます。ぜひ応援してあげてください。
前売券は、チケットぴあはじめカフェ・キー
ボー、カピオ等で発売しております。
前売券二〇〇〇円(税込み)

編集事務局

T315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

(白井啓治方)